

「鍵がかけられた戸を開いたイエス」

ヨハネの福音書 20 : 19 - 23

April.5.2026

ヨハネの福音書 20 : 19 - 23 (パワポ)

Preface

今日は、主イエス様が死より復活されたことを喜び、感謝する復活祭・イースターです。

2000年前の初代教会には、イエス様の誕生を祝うクリスマスという祝祭日はありませんでした。

ただ一つ、復活祭・イースターのみが、最大にして唯一のキリスト教会における祝祭であり、毎週日曜日に、主イエスの復活を覚え記念する礼拝が献げられました。

旧約聖書の時代からずっと続いてきた週の最後の日である、7日目の安息日土曜日に礼拝を献げるのではなく、新しい週の初めの日であり、主イエス様が復活された日である日曜日に、礼拝を献げるようになりました。

これが、今でも私たちクリスチャンが日曜日に礼拝を献げるようになった背景です。

即ち、日曜日に礼拝を献げるといふこと・礼拝を献げる人とは、キリストの復活の証人だということです。

また、イエス様が週の初めの日に復活され、それに伴って週の初めの日である日曜日に礼拝を献げるといふ行為には、天地万物を創造された三位一体なる神様によって再創造される新しい天と新しい地を待ち望むという、神がなされる新しい御業の約束を覚えるという大切な意味もあります。

残念ながら、創世記に記録されています通り、神が6日間かけ7日目に休まれ創造された現存するこの天と地は、人の罪によってのろわれたものとなってしまい、滅び終わりを迎えることが決まっています。

しかしながら、週の最後の7日目である土曜日の次の日、新しい週の初めの日である日曜日に敢えて主イエス様が復活して下さったことをもって、神が7日間かけてお造り下さった現存する天と地・古いものは過ぎ去り、新しいものが到来することを示して下さいました。

旧約聖書の、生まれてから8日目の赤ん坊に施す割礼にも、古いものは過ぎ去り、新しいものが到来することをその身に刻み覚えるという意味合いが込められており、メシア・キリストの到来と復活を予見する行為でありました。

つまり、キリストの十字架と死を信じ、割礼の代わりに洗礼を受けた者たち、毎週日曜日に礼拝を献げる者たちは、キリストの復活に余すことなくあらわされている全てのもの万物の刷新を期待し、待ち望み、そこに希望を置きながら

生きるよう神に贖い出された幸いな者たちだということです。

私たち人間にとって、神様から頂いた唯一の刷新の希望が、主イエス・キリストの復活です。

Part One

主イエス様が復活された日の朝、イエス様にお会いした女性たちは、主イエス様がよみがえられたことを弟子たちに伝えに走りました。

ところが、先程読みました聖書箇所ヨハネの福音書20：19にありますように、当の弟子たちは、ユダヤ人たちを恐れて戸に鍵をかけて隠れてしまっていました。

弟子たちが鍵をかけていたのは、ただ単純に部屋の扉（建物の戸）ではなく、彼ら自身の心の、たましいの扉に鍵をかけてしまっていたということでしょう。

もう一度19節を見てください。

ヨハネの福音書20：19（パワポ）

恐れ隠れていた弟子たちのところに訪ねて行かれた復活のイエス様は、閉じられた戸を叩いて、ロックして、弟子たちにその扉を開けてもらいながら部屋の中に入ることもお出来になったはずですが、なぜイエス様は、敢えて、鍵のかけられた戸はそのままにして、弟子たちの真ん中に立つという物理的方法を超越した方法で会いに行かれたのでしょうか？

もちろん、死より復活されたイエス様は、もうこれ以上、物理的に縛られた有限の存在ではなく、天地万物をお造りになられた神であられることを一目瞭然のかたちであらわしなされるという目的もあったと思います。

でもそれ以上に、彼ら弟子たちの心の扉が、たましいにかけられた鍵が開かない限り、その部屋の扉は決して開かれないということを知っておられたからだと思います。

つまり、部屋の扉を開くことよりも、弟子たちの心の扉を開くことの方が重要だということを知っておられたからです。

人と繋がるのが怖い、イエス・キリストを信じる者として生きることが怖い、キリスト者として人前に立つのが怖い、クリスチャンとして社会で生きることが怖い、イエス・キリストの証人として世の喧騒に出て行くことが恐い、または恥ずかしい、出来ることなら隠しておきたい、後ろめたい、カッコ悪いことだと思えてしまっている限り、復活の事実が自分にとって最も大切にしたい真理であり事実であると思えない限り、物理的な部屋の扉が開かれることは決してないでしょう。

イエス様にとって大事なことは、そんな弟子たちの心の、たましいの扉を開いてあげることでした。

祭司長たちやローマの軍人に捕まってしまうかもしれないという恐れに縛られて、戸に鍵をかけて隠れていた弟子たちに、イエス様がかけた第一声は、「平安があなたがたにありますように」という「恐れる必要はありません。なぜなら、平安があなたがたとともにあるから」という霊的事実を伝える言葉でした。

そして、イエス様がイエス様である証拠、手と脇腹の傷をお見せ下さいました。

すると弟子たちは、そんなイエス様のことを見て、喜ぶんです。

ヨハネの福音書 20 : 20 (パワポ)

私たちも弟子たち同じように、クリスチャンであっても、怖くて隠れてしまいたい時があり、ことがあります、実際に隠れてしまうことがあるように思います。

明日が怖くて、生きることが怖くて、仕事が怖くて、健康が優れないことが怖くて、または委ねられている使命が怖くて、その使命を生きることにくたびれて、恐れに駆られて隠れてしまうことがあります。

一人の世界に浸り、一人で考える思考の深みにハマって行き、心を閉じてしまうことがあります。

でもイエス様は、そんな私たちに会いに来て下さいます。

会いに来て下さって、そこに神という真理の光を照らして下さりながら閉ざされた心の扉を開いて下さいます。

そうして、神のかたちなるお方、神より人に与えられし唯一の救いの名である主イエス様がともにおられるという事実を悟ると、一瞬にして平安が訪れ、神なるお方を見て知って喜び、その閉ざした扉を今一度開こうという勇気が沸いてきます。

光に照らし出されて闇が消えて無くなって行くかのように、「怖さ」という闇が、怖さの代わりに、期待と安堵が沸き上がってきます。

また私自身のことで申し訳ないのですが、私にとって土浦めぐみ教会の主任牧師という神からの召命は、私の力や能力ではどうにもこうにもいかない、手に負えないかなわないもので、毎日が、毎週がアップダウンがとてつもなく激しいジェットコースターのように、めまいと酔いと恐怖でひとり殻に閉じこもってしまうことがあります。

そんな時、思い出したかのように必ず実践する、イエス様が唯一「そうしなさい」と勧めて下さった「閉じこもり」、「隠れる」ということをします。

マタイの福音書 6 : 6 です。

マタイの福音書 6 : 6 (パワポ)

恐怖と、先行きの見えない不安と、もうこれ以上出来ないという脱力感と、

能力の限界と、人目が怖くて仕方がない時に閉じこもり、深みにひとしきりどっぷり沈んで、思い出したかのように私がすることは、隠れたところにおられる父に祈るために部屋に籠もることです。

部屋籠もった時の私の祈り方は、ただ椅子に座って、または跪いて、「父よ、イエス様よ、聖霊様よ」とただ呟き、ひとしきりつぶやいてから、唯一の拠り所のような気持ちで聖書を開き、聖書を読みながら、神の御声を待ち望みます。ただ神の言葉を読むという、御声に聞くという祈りの時間を持ちます。

すると、これは100%と断言出来ますが、100%、恐れて鍵をかけて閉じてしまった私の心の扉をよそに、イエス様が私の心の真ん中に立って下さって、「豊和、プンファヤ、平安があなたとともにあるように。わたしがあなたの名を呼んだ。わたしは、あなたが水の中を過ぎるときも、火の中を歩く時も、あなたとともにいる」というような思いとともに平安を与えて下さいます。

体のどこなのかはよく分かりませんが、体の中の、頭の中の、すべての部分と言いましょか、体の内側全体に光が差し込み、戸を開けて、キリストが確かに生きておられるということを明かす証人としてまた生きようと、神より任せられた外の世界にまた出て行くことが出来るようになります。

これを、時には毎日、ほぼ毎週繰り返しながら、「ああ、この神さまのジェットコースター、めっちゃ楽しい」と思わせられながら、思いながら、与えられたこのいのちを生きております。

私たちは、イエス様がともにいて下さっているという事実を悟り、平安を経験した時、恐怖をかなぐり捨てて、また事新たに心を開くことが出来ます。

Part Two

また、イエス様が開いて下さった弟子たちの心は、失敗によって閉じてしまった心でした。

弟子たちは、イエス様が十字架に架けられた時、イエス様に背を向け、イエス様から逃げて行きました。

ところが、そんな弟子たちをイエス様は当然であるかのようにお赦しになり、受け止めてあげただけでなく、彼らに改めて使命を下さいました。

ヨハネの福音書20：21（パウロ）

イエス様は、今一度弟子たちを、主イエス・キリストの証人としてお立てになりました。

イエス様は、ご自身が死より復活された事実をご自身でお示しになろうとするならば、神なるお方ですから、もっと効率よく一瞬でこの世界にお示しになることがお出来になるにも関わらず、むしろそうされるのではなく、死より復活されたイエス様に出会い、平安を頂き、確かにイエス様は今も生きて働かれ

る神であられるということを知った、悟った人を通してお示しになるとお決めになりました。

コリント人への手紙第一 1 : 17 - 25 (パウロ)

「宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされた」、つまり、砕けた、壊れた、破れた土の器のような私たちの存在をもって、主イエスの十字架と復活をこの世におあらわしになると、神がお決めになりました。

失敗してしまった、背を向けてしまった、裏切ってしまった弟子たちを我がことのように受け止め、受け入れ、愛し、喜び、尊び、大事にして下さりながら、そんな彼らと、私たちと一体となって、この世が神を知れるようになるとお決めになりました。

これがまた、ヨハネの福音書 20 : 22 の御言葉に繋がって行きます。

ヨハネの福音書 20 : 22 (パウロ)

弟子たちの失敗と挫折は、聖霊なる神様に従い尽くす心を持つようになるために必要な過程だったんだと思います。

失敗と挫折によって神の前に死ぬ、死んだという事実を自他ともに認めるところに立って初めて、聖霊を受ける準備が整うということでしょう。

彼らはもうこれ以上、自分たちの意思や決心や能力によっては物事成らないということを知りました。

もちろん、かと言って、私たちの努力とか、忍耐とか、神の言葉を守ろうとか、イエス様に従って生きようという決心などすべてが無駄で、何にもならないということではありません。

その決心や意思や行いできえも、すべてが神からのものであり、自分の功績や手柄ではなく、ただ恵みであることを平安のうちに常に認め続けるように、心や考え方や世界観が変わる変わったということです。

主なる神様は、失敗した人をお用いなさいます。

イエス様のうちにあっては、失敗や挫折さえも資質や資格となります。

ゆえに私たちは、失敗したからと言って、誰かを責め立て、または自分の心を閉じる必要はありません。

ただすべきことは、聖霊なる神様の満たしを求め、私の内に住んで下さる聖霊様の願っておられることが何なのかを聞き、探り、探る心を養い、聖霊様に従おうとし、従って行くなれば、私たちが考えも出来なかった驚くような御霊の実をいつの間にか結ばせて頂いていることに気付く時が来るでしょう。

Part Three

そしてさらに3つ目に、イエス様が開いて下さった弟子たちの心とは、罪に

よって閉じられた心・たましいでした。

罪は、私たちの心を、たましいを閉じさせてしまいます。

祈りの扉を閉じさせ、賛美の扉を閉じさせ、愛することの扉を閉じさせてしまいます。

弟子たちの心も、神であられるお方を否認するという人の罪の中で最も根幹的な罪に陥り、逃亡した罪悪感ゆえに、閉じられてしまいました。

それでもイエス様は、そんな弟子たちに語り掛けながら、慰め、励まし、罪の奴隷からの解放を宣言して下さいました。

ヨハネの福音書 20 : 23 (パウロ)

「あなたが、神を否認したという罪の中の罪を犯したにも関わらず、神に赦されたという救いの経験を、神の救いを宣べ伝えなさい。

あなたの罪は神によって赦されているから、安心して他者の罪を赦し、また、神のその人への罪の赦しを宣言し、安心させてあげなさい。

その人たちにも、あなたがたがそうであったように、主イエスにある平安を経験させてあげなさい。

罪の赦しという神の愛を分かち合いなさい」と、キリストの証人として生きる祝福を授けて下さいました。

キリストの証人として生きること、宣教・伝道とは、人々に、神による罪の赦しを頂けるといい知らせ・福音を伝えることですが、弟子たちは、福音を宣べ伝えることによって、イエス様を受け入れた人々の罪の赦しだけでなく、弟子たち自らの変わらぬ罪の赦しを確信することが出来ました。

だから弟子たちは、自分たちを迫害した、自分たちのいのちを殺めようとした、実際にいのちを殺めた人々までも赦し、神の赦しの福音を宣べ伝えることが出来ました。

キリストにあって聖霊を受けるとは、自分以外の人の罪を赦すことであります。

誰かの罪を赦すということが、福音を宣べ伝えることであり、福音を宣べ伝えるとは、神によってもう既に、そしてこれからも永遠に罪赦された者として永遠に生きることを自らのたましい・心にあって確認させ続けて頂くということです。

そして、赦されたいのちを喜びながら、幸いのうちに生きられるということです。

Conclusion

私たちが目を離さないで、いつも目を向けるべきお方は、十字架の死より復活された主イエス・キリストです。

この方からどれだけ目を離さないでいられるかが、私たちの人生を決めます。
この方にどれだけ目を向け続けるかが、私たちのいのちを決めます。
私たちの人生を決め、いのちを決める決定打は、どれだけイエス様にあって、
心の扉を開いて頂くかに掛かっています。
これが、一貫した聖書の教えであり、神が私たちに語り続けておられる真理
です。

恐れ、失敗、罪によって閉ざされた私たちの心の戸を開き、平安と平和、使
命と召命、赦しと祝福を、生きているという実感と、永遠のいのちという事実
を与えて下さるお方が、死より復活されたイエス様です。

私たち、復活されたイエス様に目を向け続け、イエス様が下さった復活の使
命をこの世界と、この世界の人々に果たすいのちを生きられたら、なんと幸い
なことかと思えます。
そう生きる者でありたいと願います。
お祈りいたします。

祝祷：ヨハネの福音書 20：21